

町史だより

西原のこまぼくその⑥

まつりのなかのこまぼく・綱ひき(幸地)

今回は幸地の綱ひきを紹介します。

1 ワラ購入(七月十五日)



写真①

幸地では、綱の材料となるワラを金武町伊芸から購入しています。ワラを購入するようになったのは十五年ほど前からで、それ以前はマカヤ(チガヤ)を使用していました。マカヤはウシリーとよばれる十五歳の男の子を中心に、子ども達が銅鑼を手に各家庭を訪れ、ウサカティとして徴収しました。ウサカティはその家の中学二年生以上の男性の数に応じて徴収されたそうです。

今回購入したワラはトラックで児童公園まで運び、ブルーシートをかぶせて保管されました。

2 ニーサー綱(七月二十二日)



写真②

ニーサー綱は青年たちが中心となって行われる綱ひきのことです。以前は幸地と棚原で見られましたが、現在では幸地ののみ行われおり、カドウとよばれるヒヌカン(火の神)のある通りで行われます。そこはかつてムラヤー(村屋)のあった、幸地の中心地とされていた場所です。以前はウファチ綱もカドウでひいていましたが、今はニーサー綱だけカドウで行われています。戦後間もない頃まではニーサー綱は夜九時、十時から綱づくりを始め、明け方の四時、五時にひいたそうです。現在は綱を前もつてつくとおき、当日は夜十時頃に綱をひきます。勝負は東(雄綱)と西(雌綱)に分かれて二度行われ、回目は東が、二回目は西が勝利を収めました。

写真③



終了後、雄綱はカドウで、雌綱は別の場所です。綱は巻かれ、道路脇に置かれました。

3 ウファチ綱(七月二十三日)

この日は早朝から児童公園でウファ

写真④



ます。綱づくりは十時間以上の時間を要し、両綱とも完成した時には夕方七時を回っていました。綱が出来上がると綱ひきの御願が行われ、幸地グスクにあるビージルではウンサク(神酒)が供えられました。

ウファチ綱が始まったのは、日も暮れた午後八時頃でした。会場となった公民館前の道路では雄綱と雌綱がぶつかり合い、大勢の観客が勝敗の行方を見守りました。綱ひきは二回行われ、二回目は西が、二回目は東が勝利しました。綱ひきが終わると、御願用としてあらかじめ両綱の本体にくくりつけておいたウガンジナを取り外し、昨夜と同じ場所まで運んでとぐろ状に巻いて置きます。本来は本体を持つていかなければならないのですが、数年前からウファチ綱の綱を那覇市小緑の大嶺に売っている

写真⑤



ため、ウガンジナを作るようになったそうです。このとぐろを巻く綱はハブゲイシ(ハブ返し)を意味しているそうです。また、幸地の綱ひきにはヒーゲイシ(火返し)や、子どもの成長を祈るために行われるともいわれています。こうした話は我謝や小波津でも伝わっているそうです。

そう考えると、綱ひきにはいろいろな願いが込められているのかもしれないね。

ウサカティ：まつりのときに割り当てられる負担金

ムラヤー(村屋)：現在の公民館に相当する施設

写真① ワラの搬入(金武町伊芸)／写真② ニーサー綱(カドウ)／写真③ とぐろ状にまかれた雄綱(カドウ)／写真④ 綱づくり(幸地児童公園)／写真⑤ ウファチ綱(幸地公民館前道路)

【参考文献】

『西原町史』第四巻 資料編三「西原の民俗」
西原町史編纂委員会／『沖縄語辞典』国立国語研究所／『沖縄の祭祀と信仰』平敷令治